

発 達 検 査 の も つ イ メ ー ジ									
新 版 K 式 発 達 検 査 を め ぐ っ て							そ の 7		
							大 谷 多 加 志		

前号の終わりに、発達相談を受ける際の保護者の不安感と、支援者との思いのギャップについて触れました。今回はそのギャップと関連すると思われる「発達検査のもつイメージ」について掘り下げていきたいと思えます。

知能検査や発達検査の持つイメージというのは、一般的には必ずしもよいものとは言えないでしょう。人の精神活動を数値化する訳ですからナイーブな性質を持っていることはもちろんです。信用ならない、アテにならないと警戒している方も決して少なくないでしょう。またアメリカにおいては一時期知能検査の使用が禁止された州がある（松下・生澤,2003）という事実もあります。知能検査や発達検査がこれまでどのように用いられてきたのかということも、検査のもつイメージと無関係ではないように思えます。

知能検査・発達検査の歴史

現在用いられている知能検査の原型は、1905年にフランスのビネーが作成したものだと言われています。当時ビネーはフランスの公教育省の委員会に参加していましたが、その委員会の目的は「同級生ほどには学校で与えられる教育からの恩恵を受けることができない子どもたちに適用すべき制度を研究すること」(ビネー知能検査法の原典より)でした。

時代背景が異なりますが、現代で言えば「特別支援教育」の体制を整備することを目的にしていたわけです。そして、前提としてどのように特別な教育が必要な子どもを見つけ出すのかということが課題になり、そのために考えた手法が、後のビネーの知能検査へと発展していったのです。

ここに、先に述べた検査を用いる者と受ける者との間にあるギャップが見えるように思います。つまり教育を提供する側から言えば、検査は子どもに応じた適切な教育を選択するためのツールであったわけですが、これを教育を受ける側から見てみると一般的な教育は適さないと「選別される」ツールに見えてもおかしくないということです。

養護学校（現在の特別支援学校）の設置が義務化される以前は、就学免除や就学猶予の判断に際して、知能検査や発達検査が用いられていたという事実も、心に留めておく必要があるでしょう。

支援者がもつ検査のイメージ

次は少し視点を変えて、発達検査を使用する支援者にとっての「発達検査のイメージ」について考えてみたいと思えます。発達検査について初めて学ぶ方から、こうした声を聴くことがあります。

「各項目が子どものどんな能力を測っているのかを知りたい」

「ある課題がクリアできなかった時、どのような支援をすればクリアできるようになるのかを知りたい」
などです。

これらの言葉の中にも発達検査をどのようなものと考えているか、そのイメージがうかがえるように思います。次は、これらの言葉の背景にあるものにも目を向け、掘り下げて考えていきたいと思います。

どんな能力を測っているのか

この言葉の背景には「発達＝能力の獲得」という発達観があるように思います。わかりやすく言えば、「〇歳になったら〇〇ができる」という発達観、と言い換えることもできるでしょうか。

この考え方自体はかなり一般的なものです。例えば母子手帳にも子どもの発達状況についてチェック項目が設けられています。はいはいができているか、独り歩きができるか、言葉は出ているか。このような「能力」の獲得の可否から、子どもの発達状況を判断しようとしているわけです。他にも質問紙形式の発達検査であれば母子手帳よりはさらに細かく、チェックすべき項目が挙げられています。

新版 K 式発達検査も、もちろん子どもの能力の発達を見る側面もあるのですが、それだけではないがゆえに、今まで重用し続けられてきたのではと思っています。その理由の1つは、これは元々ビネーの考え方であるのですが『人間の活動を単純な心的活動に分けることはできないと考え、複雑な知的活動そのものをとらえようとした』という点にあります(松下・生澤,2003)。

例えば、積木を積む、型はめをするという

一見単純な行為の中にも、認知、判断、注意、意図、動機、対人関係のあり方など、様々な要素が関与します。「この項目では注意の部分だけを測ろう！」と課題を構成して無理に要素に分解するのではなく、総合的な活動として観察しようとするのがビネーの考え方で、K 式発達検査もそれを踏襲しているのです。

どのような支援をすればできるようになるか

この言葉は、発達検査の範疇を越えて、発達観、人間観、発達支援に関する考え方に至るまで、本当に色々と考えさせられる面を持っています。

まず、多くの子どもは普通に日々を暮らしている中で、発達検査の課題として設定されているようなことが自然とこなせるようになっている、という大前提があります。赤ちゃんは自分の首がすわるように首を鍛えたりはしない、と言えいいでしょうか。自分の頭が支えられるほど首に力がつく、その一番大きな原動力は「周囲を見ること」だと言われています。そして子どもがなぜ「周囲を見る」かと言えば、それは赤ちゃん自身の好奇心だったり、大人の働きかけだったり、周囲にある物であったりするわけです。「赤ちゃん自身の要因」「働きかける他者の要因」「物理的な環境要因」など様々な要素が絡んでいます。音がしたり、人が声をかけてきたり、物を見せられたり…。様々な関わり、刺激に対して赤ちゃんが関心を持ち、何とか見ようとして精いっぱい首を動かすことが、結果として頭を支えるだけの力をもたらすわけです。首がすわるのは、あくまでその結果です。

課題をクリアできない子どもがいた時、どうしたらクリアできるかを考える前に、どのようにクリアできないのか、自然には育ちにくい要因があるならばそれは何かを考えてい

くことが、最終的にはその子なりの育ちを支えていくことにつながるのだと思います。

先ほど述べた「〇歳になったら〇〇ができる」という発達観は、決して間違っている訳ではありません。発達の目安として有効で、だからこそ今でも重用されているのです。しかし、障害のある人の困難さが「能力の不足」だけに関連づけられたり、支援が「能力の不足」だけに注目し補うものにならないように、注意を払っておく必要があるでしょう。

検査万能のイメージ

私自身も初めて発達検査を実施した時は、これでこの子の「発達」が全てわかるのだと思っていました。そもそも「発達」って何だということからよくわかってはいなかったのですが、発達検査なのだから「発達」のことは全部わかるようになっていっているのだろうという「万能」のイメージを勝手に持っていたのです。先に述べた「発達=能力」のイメージも、もちろん持っていました。

今はある程度自分なりに整理されてきたと思っていますが、そう思えるまでに相当の時間を要しました。そして、最終的にどのような発達観を持って検査を活用するかは、1つの答えがあるのではなく、人それぞれなのだろうとも思うようになりました。

1つのツールとして…

発達検査なんて役に立たない！という言葉は、障害を持つ弟が受けた検査について母が言っていた言葉です。

発達検査に関わる仕事をする者として、こんなイメージだけが広がっていくのは悲しすぎますが、「検査は有効、必要！」と偏っていくことにも、違和感があります。

「検査をしなければ子どもを理解できない

人には、子どものために検査結果を活用することはできない」(青山,2012)と言われるように、検査はあくまでも子どもを理解するための1つのツールです。あくまでもツールとしてその限界は理解した上で、ささやかでも子どもたちの育ちを支えるものとして、活用してもらえればと願います。

引用文献

松下裕・生澤雅夫 2003年

新版 K 式発達検査 1983 年版から新版 K 式発達検査 2001 へ

京都国際社会福祉センター紀要

発達療育研究 2003 年別冊 p1-19

青山芳文 2012 年

発達の視点を踏まえた子どもの理解と支援のために-検査の活用は有効性と限界を十分に理解して-

京都国際社会福祉センター紀要

発達療育研究 2012 年別冊 p43-54

大井清吉・山本良典・津田敬子訳

Alfred Binet et Th.Simon 著

ビネ知能検査法の原典 1977 年

日本文化科学社

バックナンバー

第 10 号 発達検査でわかること

第 11 号 通過・不通過

第 12 号 解釈・見立て・所見

第 13 号 検査手続き

第 14 号 導入

第 15 号 発達検査でわかること②